

# 明治期以降、河内・摂津における 「楠公遺蹟」の「発見」と「創造」

——「臣民」教育・地域振興・観光——

塚 崎 昌 之

キーワード：近代「楠公遺蹟」、「臣民」教育、地域振興、観光

## はじめに

大阪大谷大学の最寄り駅、近鉄長野線滝谷不動駅のホームにかかる観光案内板を見たことがあるだろうか。挙げられている12か所には、駅からの方角、距離が書かれている。「楠公庵」、「建水分神社」などは、峠を越えて5 km 以上も離れた場所であり、駅からバスはなく、徒歩で行かざるを得ない。現在、そこを訪れる人は、富田林駅からバスで向い、滝谷不動駅から歩いていく人は皆無に近い。それでは、なぜ、そのような観光案内板が掲げられているのだろうか。

実は、12か所のうち、先の2か所を合わせて、「楠公生誕地」、「下赤坂城跡」、「寄手塚、身方塚」（敵味方塚）など8か所が「楠公遺蹟」に関わる場所なのである。これらの場所は、楠木正成が湊川の戦いで戦死してから600年に当たる1935年の「大楠公六百年祭」のときに、大阪鐵道（現在の近鉄南大阪線・長野線・道明寺線）が、「楠公遺蹟めぐり」のハイキングコースとして、設定したものであり、例えば、家族向けのコースとしては「滝谷不動駅－滝谷不動－敵味方塚－建水分神社－楠公生誕地－下赤坂城跡－楠公庵－観心寺－後村上天皇陵－河合寺－長野駅へ約十五軒（所要時間六時間）」<sup>1)</sup>があった。

実際に、大楠公六百年祭の最中の1935年5月10～12日には、大阪府聯合青年団が府下の全青年団員中から100名の模範青年を選抜し、大鐵瀧谷不動駅をスタートして、龍泉寺から楠公庵、千早城、葛木神社などを巡歴する「大楠公六百年祭楠公史蹟巡歴」が実行された。現地で魚澄惣五郎大阪府立女子専門学校教授など六講師による遺徳追慕、精神修養講習会も開催された<sup>2)</sup>。ただのハイキングコースではなく、「忠孝」の「臣民道徳」を学ぶ場所として「開発」されていったのである。

本稿では、明治期以降、南河内を中心に、河内・摂津で「楠公遺蹟」が誰によって、どのように「発見」され、さらに「創造」され、そのことが社会にどのような影響を与えていったのかを考察していきたい。

## 1. 江戸時代末期－「忠臣」楠木正成像の形成

楠木正成が有名となったのは、『太平記』に千早赤坂の戦い、「櫻井の別れ」、湊川の戦いの様子などが、

生き生きと描かれたためである。1370年前後に成立したと考えられる『太平記』は複数の作者からなっており、その意図するものも複雑に絡み合っているというのが、現在の研究状況であり、後醍醐天皇・南朝賛美のために作られた書物ではない。

『太平記』、楠木正成が、多くの人々に親しまれるようになったのは、江戸時代に入った17世紀前半、『太平記』の中でも、主に楠木正成が活躍した時代を扱った注釈書である『太平記評判秘伝理尽鈔』が成立し、大名・武士・儒学者の間で読まれるようになってからである。彼らにとって、正成は仁政による理想の治者・指導者像、兵学者であった。一方、後醍醐天皇は正成を湊川に向かわせた「叡智浅き」人物として描かれた。『太平記評判秘伝理尽鈔』を台本にした「太平記読み」によって、民衆にも人気が広まり、17世紀後半には講談に発展した。反体制のシンボルとして、由比正雪と楠木正成の同一視もなされた。17世紀末からは、「太平記物」として、歌舞伎・浄瑠璃の様々な演目にも取り上げられた。中には「忠臣蔵」の大石内蔵助も楠木正成の生まれ変わりとして風聞するもの、遊女と色遊びに溺れている正行を描く浄瑠璃もあった。江戸時代の歌舞伎では、後醍醐天皇を含めた天皇までも民衆の笑いの対象になった。明治期になっては許されない表現も多かった。

江戸時代の民衆にとっての楠木正成は、天皇に尽くすだけの「忠」ではなく、天皇を諫める「忠」も持ち合わせた人物であり、明治期以降の片務的な「忠臣」ではなかった。また、権力に対して反逆する武略・智謀の将であり、悪人を退治し、「弱きを助け強きを挫く」人物であった。実力者でありながら世に入れない人物、悲劇の武将への思い入れもあった。また、天皇といえども、失政をする天皇は排除される存在であった。民衆にとっての『太平記』は、旧秩序に反逆して戦ったアウトローの物語であり、正成は民衆の声の代弁者として、「解放」、「革命」のメタファーとして機能したのであった。

この「楠公像」を一転させたのが、後期水戸学であった。水戸学の源流となった『大日本史』の編集を着手させ、「大義名分」を重んじた徳川光圀が、1692年、湊川に「嗚呼忠臣楠子之墓」を建立させた。1825年、会沢正志斎が『新論』を著し、この書で初めて「国体」の概念を表出した。その要点は三点あった。一つ目は、天皇の万世一系の神聖性であり、そのことは天皇が無謬であることを意味した。二つ目は、日本は一君万民の「家族国家」であり、君臣の親密性が強調され、天皇に対する反逆の否定を意味した。三つ目は、「忠」は自発的な奉公心であり、片務的な「忠孝一致」、「滅私奉公」を強調した。それゆえに日本の「国体」は天壤無窮であり、楠木正成ら国家に英烈の功績があった諸王、諸臣を神として祭祀すべきことを主張した。その上で、人々が祀るべき祭日の一つに、楠木正成が湊川で戦死した5月25日の楠贈左中将忌日を強調した。ただし、後期水戸学は幕府を否定する思想ではなく、幕府が天皇を輔弼し、天皇に代わって各藩を統治するという天皇の権威を利用しようとした保守思想であった。

会沢正志斎にも師事した吉田松陰が、楠木正成を崇敬したことは有名である。松陰は自らを正成の生まれ変わりに擬し、1851、1852、1853年と3回、湊川の「嗚呼忠臣楠子之墓」を訪れた。また、ペリー来航直前の1853年2月には、20日近く南河内に滞在し、千早城・赤坂城址等を踏査した<sup>3)</sup>。翌年、ペリー再航の際、渡航を求めて、旗艦ポーハタン号に乗船しようとしたことから、長州へ檻送され、幽囚の身となった。1856年、病気のために自宅での謹慎を命じられたときに、『七生説』を著した。幽囚室（現松陰神社）には、「七生滅賊」と「三余読書（冬夜雨）」を座右の銘に掲げた。1859年、死刑のため萩から江戸に送られるときに編んだ漢詩集『縛吾集』の一節には

「世に楠判官なかりせば 君臣の義まさにあれなんとす

世に豊太閤なかりせば いずれか華夷をしてこらしめん」

とあり、「一君万民」と対外膨張を主張した。遺言の書『留魂録』は、「七たびも生きかへりつつ夷をぞ攘はんこころ吾れ忘れめや」と締めくくった<sup>4)</sup>。楠木正成の「忠」の精神が後世に引き継がれていっているのと同じように、自分の肉体は減びても、彼が掲げる「尊王攘夷」の精神も後世に途切れることなく引き継がれていくだろうという「確信」であった。

松陰は「国体」、「一君万民」を強調、超法規的・超制度的な解放・平等の原理としての天皇をイメージした。その思想は、明治維新の「元勳」たちに大きな影響を与えた。

「楠公祭」<sup>5)</sup>は楠公を崇拜し、「今楠公」とも呼ばれた久留米藩士真木保臣が1847年5月25日には行っていたことが確認できる。それより前の年から始めていたかも知れない。真木は久留米藩の神職の家に生まれ11歳で神職に付き、会沢正志斎に学び、尊王攘夷派として活動した。1862年5月25日の「楠公祭」の日には、大阪の久留米藩邸で寺田屋事件の「義士」8名を楠公に「従祠」した。天皇に「忠義」を果したとして、「神」として祀ったのである。下々の者でも「忠義」を尽くせば、「神」になれることを示した。その「楠公祭」は、まだ、私的なものであったが、天皇に対して直接的に「忠義」を尽くすことであり、幕藩体制を否定する論理となっていた。

その後、「楠公祭」は尊王攘夷派の「志士」たちに広がっていき、1864年5月には、長州藩主毛利敬親が藩の公式行事として山口明倫館で「楠公祭」を行い、吉田松陰ら17名を「従祠」した。同じ日に、1863年の八月一八日の政変により、長州藩に逃れてきており、維新後、新政府の最高位の太政大臣となった三条実美が祭主となって、真木とともに山口湯田の旅館で「楠公祭」を行った。それを手始めに、長州藩では毎年の「楠公祭」の折に殉難者の霊を「従祠」していった。真木は長州藩と行動を共にし、1864年8月の禁門の変に参加、天王山で自害した。

また、この頃、各地に楠公社が創建され、「志士」たちは「生きて天朝に忠義を励み、志が遂げられなければ、死して護国の靈魂となり、国賊を滅さしめたまえ」と祈願したとされる。長州藩が1865年に「殉難志士」たちを祀る桜山招魂社を設けたのを嚆矢に、1868年、明治天皇が維新を目前にして倒れた天誅組などの「志士」たちの御霊を奉祀せよとの詔・御沙汰を發した。それを受けて京都の公家や山口・高知・福井・鳥取・熊本などの諸藩が京都の靈山の山頂にそれぞれの祠宇<sup>6)</sup>を建立したものが、京都靈山護国神社となっていた。1869年に東京に遷都されると、東京招魂社が設けられ、1879年に靖国神社となった。つまり、「楠公祭」に「志士」たちを「従祠」したことが、靖国神社のルーツとなっていくのである<sup>7)</sup>。

## 2. 明治時代前半期－民衆教育への登場と「楠公遺跡」の可視化

1872年、日本最初の近代的学校教育法規である「学制」が公布された。欧米をモデルにしたものであり、個人主義的・功利主義的傾向が目立った。自由民権運動の盛り上がりを危惧した明治天皇は、1879年、「学制」が知識教育・欧米的価値に偏っていることに対する批判として、元田永学に『教学聖旨』を執筆させた。「我祖訓国典ノ大旨教学ノ要、仁義忠孝ヲ明カニシテ、智識才芸ヲ究メ、以テ人道ヲ尽スハ、我祖訓国典ノ大旨…」と儒教を基にする徳育教育を強調し、「忠孝」を重んじる『教育勅語』の基礎となるものであった。

1880年には「改正教育令」が発令され、教育の国家統制、政府の干渉を基本方針として打ち出した。それまでは教科リストの最後であった修身科がトップになった。翌1881年の「小学校教則綱領」で、小学校における修身科の授業時間数が「学制」の時に比べて12倍に増えた。同時に定められた「小学校教員心得」の第一項では、「普通教育ノ目的」は「人ヲ導キテ善良ナラシムルハ多識ナラシムルニ比スレハ更ニ緊要ナリトス故ニ教員タル者ハ殊ニ道德ノ教育ニ力ヲ用ヒ生徒ヲシテ皇室ニ忠ニシテ国家ヲ愛シ父母ニ孝ニシテ長上ヲ敬シ朋友ニ信ニシテ卑幼ヲ慈シ及自己ヲ重ニスル等凡人倫ノ大道ニ通曉セシメ」ることとされ、知識をつけることよりも道德教育が大切なこととされた。

1882年には、明治天皇が元田永孚に命じ、具体的に「仁義忠孝」を教える修身書として『幼学綱要』全7巻を執筆させ、宮内省から41,000部を学校に頒布させた。平重盛が父清盛を諫めた「孝行第一」に続き、楠木正成・正行父子の話は「忠節第二」として第1巻の24～30頁（見開きで1頁）に掲載された。

1886年、「学校令」が公布され、国家主義的教育を確立した。教科書検定制度も始まり、1887年、文部省編纂局『尋常小学読本六』が発刊されたが、「後醍醐天皇」、「楠正成一」、「同二」、「楠正行一」、「同二」の項が27頁にわたって記載された。楠木正成の元弘の変時の千早・赤坂での活躍よりも、「櫻井の別れ」、「母の教え」、後醍醐陵、如意輪堂、四條畷の戦い等、楠木正行が多く取り上げられた。この読本の最後は、正成・正季兄弟（一番）、正行・正時兄弟（二番）を歌った唱歌『忠臣』の歌詞の「忠臣あゝ忠臣兄弟のひと 忠臣あゝ忠臣たぐひなや」で締めくくられた。「読む」・「歌う」という行為を通じて、天皇制「道德」を刷り込もうとしたわけだが、この『忠臣』につけられたメロディはイギリスのノートン夫人が1855年の作品集に収めた『Juanita』であった。讃美歌「ながき道 ひとりあるきて」にもこのメロディが使われている<sup>8)</sup>。

1890年10月30日、元田永孚が草案を作成した『教育勅語』が公布された。「我カ臣民クク忠ニクク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ国体ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦実ニ此ニ存ス…」とされ、「国体ノ精華」とは、つまり、天皇の「有徳」と臣民の「忠孝」であった。『教育勅語』の核心部は「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ…」であり、この戦時の徳目の象徴が楠公父子であった。ちなみに「爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ…」から始まる平時の徳目を象徴する人物が二宮金次郎であった。それまでは、「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」、「身体髪膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なり、身を立て道を行ない名を後世に残すは孝の終りなり」とされ、一般的には忠と孝は並び立たないと考えられていたことを一転させ、「天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン」として、先祖代々が天皇に「忠」を尽くしてきたのだから、自分が天皇に「忠」を尽くすことは、先祖に対する「孝」になるという「忠孝一致」、「忠孝両全」の思想を作り上げた。『教育勅語』によって、知識よりも「道德」を重んじることが、国家の確固たる方針となった。

教育と並んで「忠」を刷り込むことが重視されたのが軍隊であった。支配者側の身分にあり、我が「家」の体面を重んじた武士とは異なり、徴兵制の兵士は、指揮官の上意下達の下、自らの意志を持つことなく、命令に整然と従って戦わせなければならなかった。

1872年1月に兵部省が陸軍、海軍に出した「読法」の第一条は「…兵員ニ加フル者ハ忠誠ヲ本トシ…」であった。1878年、西南戦争の恩賞不公平、減給反対などから、近衛兵が反乱を起こそうとした竹橋事件をきっかけとして、軍律強化のために制定された1882年の『軍人勅諭』でも、軍人の守るべき徳目の

最初が「一軍人は忠節を盡すを本分とすへし…」とされた。『軍人勅諭』起草・頒布の中心となり、帝国陸軍生みの親ともいえる山県有朋は、吉田松陰の松下村塾で学んでおり、第一の「忠臣」は楠木正成と考えていたことであろう。山県は後述する南北朝正閏問題が起きたときに、南朝を正統とする明治天皇の決定を仰ぐように上奏し、南朝正統の決定に大きな役割を果たした。

主要な「楠公遺蹟」は、楠木正成・正行父子の活動の拠点であり、正成が鎌倉幕府打倒に大活躍した南河内、「父子別れ」の場所とされる櫻井（現島本町）、正成が戦死した神戸の湊川、それに正行が戦死したとされる四條畷であり、河内・摂津国に広がっていた。

1868年3月、兵庫県に先立つ行政機関であった兵庫裁判所総督の東久世通禧に対して、部下6人から「嗚呼忠臣楠子之墓」のある場所に、楠木正成を祭神とする神社を造立する建議が出された。6人のうちの1人が松下村塾に学んだ伊藤博文であった。東久世は三条実美とともに八月十八日の政変時の「七卿落ち」の1人であり、三条と真木が行った山口での「楠公祭」にも参加していた。東久世は政府に請願し、政府は直ちに認め、明治天皇が金千両を下賜した。伊藤はその直後に兵庫県知事<sup>9)</sup>となり、敷地の確保などに貢献し、石灯笼を寄進している。伊藤の離任後すぐの1869年5月には仮社殿が建設され、政府主催の「楠公祭」が執行された。1872年に湊川神社は創建され、靖国神社に先立ち、「国家」のために特別な功労があった人物を祀る最初の別格官幣社となった。明治国家が「忠臣」楠木正成を独占することを意味した<sup>10)</sup>。

南河内では、1874年に千早城址の社殿を修復、1879年に千早神社と改称した。大久保利通は1875年2月、大阪会議が終わった後に狩猟のため、南河内に3日間滞在した。そのときに下赤坂城址、楠公生誕地、建水分神社、南木神社、葛木神社、千早城址を訪れ、楠公生誕地ではその荒蕪を歎き、保護と旌表を講ぜよと金一封を寄せたとされるが、真偽は定かではない。ただ、その後、西郷隆盛の片腕とも言われた府知事税所篤の采配により、整備が始まり、大久保が暗殺された1878年に「楠公誕生地碑」が建立された。ちなみに、薩摩藩出身の大久保も湊川の「嗚呼忠臣楠子之墓」を訪れている。1880年には、観心寺の「楠公首塚」の修理が完成した。

1876年には、『太平記』で創作された物語でしかない楠公父子の「櫻井の別れ」の「櫻井驛趾」に、英国公使パークスによる「楠公父子訣児之处碑」が建立された。坂本龍馬の依頼で薩長同盟を周旋し、鞍馬天狗のモデルになったとも言われる大村藩出身の大阪府権知事渡邊昇が黒幕であったと思われる。相次ぐ士族反乱への憂慮から、「忠臣」が顕彰されることを示したかったのであろう。福沢諭吉の『学問のすゝめ』第七編が楠木正成の討死を批判したものと解釈され、1874年末に引き起こされた「楠公権助論」の影響もあったかもしれない<sup>11)</sup>。「櫻井驛趾」がその地に比定されたのは、湊川に向かう正成が通過した西国街道沿に、菊水の旗を立てかけたとされる老松があったためである。どう考えても、南北朝時代の松が550年を経て、存在していたとは思えない。また、古代に「櫻井驛」と言う名称の驛家は存在せず、その付近には「大原驛」があったとされる。「櫻井驛址」で発掘調査がなされたときに驛家の存在を示す遺構・遺物は全く発見されず、現在、「大原驛」は、櫻井から少し南西に離れた高槻市梶原南遺跡だと考えられている。

1878年には、四條畷の戦いで敗れた楠木正行の「墓所」と伝承される場所に大久保利通揮毫の「従三位楠正行朝臣之墓」の石碑が建立され、1890年には、「墓所」の東1kmの飯森山麓に楠木正行を主祭神とする別格官幣社四條畷神社が創建された。この四條畷の動きにも、税所篤が大きな役割を果たしたとい

う<sup>12)</sup>。1895年には、浪速鉄道が四條畷神社・野崎観音（慈眼寺）への参詣鉄道として片町駅－四條畷駅間を開業させた。

教育・軍隊の場において、民衆・兵士への「忠」の刷り込みが始まった明治時代前期に、「楠公父子遺蹟」が、維新の「志士」らによって「発見」され、神社・石碑といった形で可視化されるようになった。

### 3. 日清・日露戦争期－ナショナリズムの高揚と「楠公遺蹟」の整備

そのような政治的な動きに対して、清朝考証学派や欧米近代実証史学の影響を受けた歴史学者の反発が生まれた。1881年から政府の手によって『大日本編年史』の編纂が開始されたが、その中心となっていたのが、重野安繹、久米邦武らであった。その過程で、重野らは『太平記』の史料的価値の否定、ひいては『太平記』に依拠する『大日本史』の批判を行うようになった。1886年、重野は楠公父子訣別の史話、「櫻井の別れ」を「拵え話」として否定した。1891年には久米が「太平記は史学に益なし」と主張した。彼らは水戸学系や国学系の学者らの厳しい批判にさらされるようになり、重野は「抹殺博士」と揶揄されるようになった。それでも、1888年に、重野は帝国大学文科大学（のちの東京帝国大学文学部）教授、久米も帝国大学文科大学教授兼臨時編年史編纂委員に就任した。ところが、1892年、久米が「神道へ祭天ノ古俗」と断じたことから、神官をはじめとした国粹主義者たちから「国体」を毀損するという猛抗議が起こり、帝大教授を辞職に追い込まれた。久米邦武筆禍事件である。翌1893年、重野も辞職に追い込まれ、『大日本編年史』編纂事業も中止となった。

1894年の日清戦争、1895年の三国干渉が起きると、『国民新聞』の徳富蘇峰が「自由民権」から「国家膨張主義」に転向したことに象徴されるように、ナショナリズムが高揚していった。その中で、日本の「価値」を見出す名勝旧蹟が「発見」されていくことになる。また、治外法権の撤廃により、1899年から内地雑居が始まることとなり、外国人による史蹟の蹂躪も危惧され、保護の必要性が訴えられた。

1898年、内務省が各府県に訓令1104号「名勝旧蹟調査」を命令し、翌年1月、大阪府は郡長・市長・区長に命令を下ろした<sup>13)</sup>。重野や久米に代わって東京帝大史学科教授になっていた三上参次が、1899年に東京府教育会で、歴史的物品及び場所の保存についての講演を行ったが、真っ先に、四條畷神社、千早城址、湊川神社の重要性を挙げた<sup>14)</sup>。さらに、三上は1904年の日露戦争開戦初期の史学会時局学術講演会において、『太平記』で「忠臣」として称えられた児島高德について「今度の我が連戦連勝は詰り歴史教育の効果が著はれたのである、…<sup>(ママ)</sup>純粹なる科学的歴史より見て否定すべき人物も歴史教育上より見れば必ずしも否定するに及ばぬ、御存知の如く重野博士は児島高德を抹殺されたから、どうか之を復活しやうと態々岡山まで出張して調査したが、復活せしむるほどの材料を発見することは出来なかつた、…此の如く科学として児島高德なるもの、存在を認めることが出来ぬとした所で併し社会教育上より見し児島高德は確かに存在して居るといふことが出来る」<sup>15)</sup>と述べた。

また、1897年に「古社寺保存法」が定められたが、1899年7月に千早城址、赤坂城址が旧蹟に、観心寺、金剛寺が名勝に指定された<sup>16)</sup>。同年8月には、観心寺所蔵の由来もはっきりしない「伝楠木正成所用藍韋威肩赤腹巻」が内務省告示の丙種国宝（丙種－甲乙丙の三種で、丙種は「歴史ノ証徴トナルモノ」）として指定された<sup>17)</sup>。

1900年、第5回内国勲業博覧会が1903年に大阪で開催されることに決定した。それを受けて、菊池侃

二大阪府知事が11月17日の府会開会式で「名所旧蹟ニ付テハ京都程ニ進マナイ、外カラ来ルモノハ大阪ノ名所旧蹟ハ何所ニアルト云ツテぼつシテ居ル、ケレトモ段々調ヘテ見ルト大阪ニハ誠ニ宜イ名所旧蹟カ多クアル、…殊ニ其歴史ハ忠孝義烈ニ関スルモノモ多クアル、實ニ是ハ大阪府ノ名誉テス、…彼ノ楠公ノ遺蹟ト云ヒ、…案内記ヲ作ツテ進ンテ諸国人ニ大阪ハ旧地テアルト云フコトヲ知ラセタイ」と発言した<sup>18)</sup>。1901年に「臨時勸業調査委員会」を組織したが、その第3部が名所旧蹟であり、そのために「大阪府史蹟調査委員会」を設立、史蹟調査事業を開始した。その目的は、「旧邦史蹟饒し、之を知るは之を愛するの始にして民族精神の發揮、郷土愛重の教養實にこの間に存し、やがては我が住む祖国郷土に対し、更に深厚なる注意を新たにし…」とされた<sup>19)</sup>。この裏には、知事の発言にもあったように京都に対する対抗意識もあった。京都では、1895年に第4回内国勸業博覧会が、平安遷都千百年祭と合わせて開かれ、平安神宮が創建され、時代祭が開始した。近代観光都市・京都のスタートと言ってもよいであろう。しかし、千年の都であり、寺社仏閣の多い京都と比べ、大阪の史蹟は貧弱であった。その中で注目されたのが、「忠孝義烈」への教育効果が期待される「楠公遺蹟」であった。

大阪の内国勸業博覧会は、敷地・建物面積が京都の約2倍、入場者数が5倍弱約530万人、1日3万人強を集め、明治維新で衰退した商都大阪の復興の全体像と「史蹟名勝」の存在を明らかにし、内外に誇示することに成功した。同年には、『大阪府誌』第5編、「名勝旧蹟」を発刊した。

南河内では、1892年頃、観心寺を本部に、観心寺の興隆保存などを目的に「忠徳楠公遺蹟興復会」が結成されたが、あまり活動はできなかつたようである<sup>20)</sup>。続いて、日清戦争開戦直後の1894年9月、「千早村楠氏紀勝会」が結成された。戦意高揚・国民統合のために、千早城址に記念標建設を計画し、寄付金の募集を行ったが、うまくいかなかった。1899年、「楠氏紀勝会」として復活したが、前の地元だけの組織とは異なり、大阪府の行政を巻き込み、総代には菊池府知事と知事時代に四條畷神社の創建を進めた西村捨三前知事が就任した。会の目的は「列強並峙の事態、忠勇の気概を励磨の秋…大いに誠忠の気宇を發揚」、「青年の学生修学旅行を為さんとする者、必ず此の靈場を巡拝…」とされ、事業の一つとして、地図の作成が図られた。1900年には、楠公戦死の日当たる5月25日に近府県中学生以上を千早神社に参拝させ、千早城址に野営させた<sup>21)</sup>。

1898年に柏原－富田林間の河陽鉄道が開通し、1899年に河南鉄道が継承、1902年に富田林－長野（現河内長野）間が開通した。また、1898年には、高野鉄道（現南海高野線）が大小路（現堺東）－長野間で開通し、1900年には大阪市内の汐見橋まで延伸した。1902年に、富田林駅前に巨大な「楠氏遺蹟里程標」<sup>22)</sup>が建立され、それと同時に、富田林駅から各「楠公遺蹟」までの要地に分岐標が設けられた。

1903年には、「楠氏紀勝会」によって、千早城址に大阪砲兵工廠が鑄造した高さ5m、重量1.7トンの銅標が建立された。また、同年には、『楠氏遺蹟志』が発刊され、「広く同志に配布し、以て国民の志気を鼓舞し、以て忠孝の大義を全からしめんと欲す」、「嗚呼忠に励み孝を重じるは、国民の大道に属す、冀くば楠氏累世忠烈の跡、世人夫れ此書に就て、之を實地に問へよ」と記され、「楠公遺蹟」現地を訪れ、「忠孝」を学ぶことを奨励した。そうした地域の動きを受けて、1905年頃から長野周辺の多くの小学校で、「楠公追慕式」が始まった<sup>23)</sup>。その前年の1904年5月25日から、富田林中学では金剛山に登山し、山頂付近にある葛木神社に参拝する「楠公祭」も始まり、1906年には、中学校最初の近代的独立図書館として「戦捷記念菊水文庫」も開設した<sup>24)</sup>。

1904年からの日露戦争では、約7万2千名ものロシア兵俘虜が日本に送られたが、その最大の収容所

は約2万8千人が収容された大阪の浜寺収容所であった。収容所では、日本語教授の教室も設けられたが、その教官たちは日本軍の「強さ」を支えた「英雄豪傑」、つまり、死を恐れずに最後まで戦った「楠公父子」の歴史をロシア兵将校に知らせようと、陸軍省の許可を得て、千早・赤坂、四条畷神社の見学を計画した。実施できたかは不明である。実施できたとしても、ロシア人に二〇三高地の「勇士」に象徴される「忠孝」を理解できたのだろうか<sup>25)</sup>。

1908年には、赤坂近郷の有志により、「楠公誕生地保勝会」の組織が計画され、遺蹟敷地の拡張や休息所の新築など、史蹟の整備顕彰を図った。1910年には、「楠公誕生地保勝会」が正式に組織され、会長に高崎親章府知事、顧問に菊池前府知事が就任、発起人には、南北朝正閏問題を引き起こすことになる大阪選出衆議院議員藤沢元造も名を連ねた。5万円の寄付金を募集したが、大口の寄付者には、大阪の二大新聞である村山龍平大阪朝日新聞社長、本山彦一大阪毎日新聞社長、また第4師団長らの名前が見られた<sup>26)</sup>。

同じ時期、他の「楠公遺蹟」の場所でも、同様な動きがみられた。「櫻井驛趾」では、1894年5月に、地元村民150名が「忠義貫乾坤碑」を建立した。1898年には、「楠公訣児処修興(会)」旨趣書<sup>27)</sup>が作られ、金5000円の寄附で記念碑「楠公訣別所」の建立を計画したが、このときは実現しなかった。

1910年初頭に、第4師団歩兵第37連隊長伊豆凡夫少将が「櫻井驛址」を訪問、パークス碑を囲む玉垣の崩壊などの荒廃を嘆くとともに、「大忠臣」の碑を外国人の手で建てたのは国辱であるとして、より巨大な碑の建立を思い立った。歩兵第37連隊は南河内も徴募区の一部であり、楠木正成の家紋とされる「菊水」から「菊水連隊」と称し、部隊章には「菊水紋」を使用していた。伊豆少将は、地元の衆議院議員植場平や三島郡長、住友吉左衛門、藤田伝三郎、貴族院議員徳川達孝伯爵(史蹟名勝天然記念物保存協会副会長)らにも呼び掛け、「楠公父子訣児之処修興会」を再発足させた。総裁には高崎知事、委員には伊豆少将他14名、顧問には大隈重信他5名が就いた。1910年6月には、大隈重信伯爵、渋沢栄一男爵らが現場を視察、伊豆少将が講話を行った。1912年6月、伊豆少将が乃木希典に揮毫を依頼、碑の作成を開始、宮内省も下賜金を出すことになった。1913年8月に、「櫻井驛趾」で「楠公父子訣別之所」建碑式が行われた。高さ455cm、巾182cm、厚さ76cmの巨大なもので、碑の建立は高槻の工兵第4大隊<sup>28)</sup>が行った<sup>29)</sup>。

湊川神社では、日清戦争開始直後の1894年8月に、陸軍経理部が境内に兵士の休憩所を設置した。8月24日、先ず名古屋の第3師団歩兵2000余名が到着、神社に参拝後、赤十字社員が接待、神戸音楽隊が奏楽し、神符が全兵士に渡され、氷水・茶菓なども配られた。この当時の湊川神社最寄りの神戸駅は、官営鉄道と山陽鉄道の結節点であり、まだ直通運転が行われておらず、列車を乗り換える時間待ちに「出征」兵士が参拝したのであった。夜中のこともあったという。時間があれば、境内の芝居小屋や銘酒屋に入ることもあったらしい。11月16日には、皇太子(後の大正天皇)も参拝した。戦利品の展覧が行われたり、威海衛陥落の祝捷会も開かれた。下関講和条約成立後も、凱旋門を設け、帰還兵士を迎えた。1904年からの日露戦争時には、官営鉄道と山陽鉄道の直通運転が開始されていたが、兵士の参拝は続けられ、正式参拝150回、4万8千名を数えたという<sup>30)</sup>。

日清戦争を機にしたナショナリズムの勃興や、交通の発達などにより、地域の「楠公遺蹟」の価値が「発見」され、人々を呼び込もうという下からの動きが始まったが、地域からの運動だけではうまくいかず、より大きい政治的勢力と結びつきながら、「楠公遺蹟」の整備が進んでいったのが、この時期であっ

た。

その一方で、1900年前後、学問的裏付けのない顕彰に重きを置き、行き過ぎた愛郷心やときには私利を目論む地方での動きに対して、『歴史地理』に集った若手歴史学者などが、学術的価値を重視する史蹟保存の論理を提唱、対立が生じ始めるような動きもあった。大阪では、小楠公「墳墓」とされた現東大阪市の六萬寺の五輪塔が証拠不十分と問題にされた<sup>31)</sup>。

ちなみに、戦前・戦中期、国民に広く歌われた「櫻井の訣別（青葉茂れる）」は1903年に発表されたが、日露戦争時に流行した。この歌が、戦前の国定教科書小学校唱歌に入っていると思込んでいる人が多いが、実はそうではない<sup>32)</sup>。この歌が流行したのは、例えば、「木の下かげに 駒とめて 世の行末をつくづくとしのお鎧の 袖の上に 散るは涙か はた露か」という歌詞の抒情性である。君臣の大義と親子の情の間で揺れる正成の内面的苦悩に共感したからであり、多大な犠牲を出した民衆自らが歌ったのである。国が求めたのは、君臣の大義に迷うことなく従う「臣民」であり、この歌を国定教科書に入れることはありえなかったのである。そういった民衆と国家のねじれた関係も生じた。

1900年に皇居前広場に建立された「大楠公馬上像」についても触れておこう。1890年代、「国民国家」形成における銅像の視覚性による社会教育的効果が盛んに議論された。現在も三大銅像とされる他の二つ、靖国神社・大村益次郎像が1893年、上野公園・西郷隆盛像が1898年に建立された。「大楠公馬上像」は、1889年に住友家が別子銅山開坑二百年記念として宮内省へ「銅像献上」を計画したことから始まった。楠木正成像に決定したのは、明治天皇・宮内省の意向であったと言われる。明治天皇は身の回りに正成のような「忠臣」が欲しかったのであろう。東京美術学校に造像を依頼し、頭部を高村光雲、身体・甲冑部を山田鬼斎・石川光明、馬を後藤貞行が担当することになった<sup>33)</sup>。もっとも苦労したのが、馬であった。日本産の馬をモデルにすると鈍重なフォルムになり、正成の「勇壮」なイメージが作れないのである。後藤はやむなく西洋馬をモデルにしたのだが、「此馬たる余が理想の馬にして従来の日本産とは少々異なる処無きに非らざれどそは未だ飼育の宜しきを得ざるの致す所なり。」<sup>34)</sup>と言いつつしなければならなかった。日本が誇るはずの「忠臣」を、西洋式の銅像、馬で表現しないと、民衆の目に焼き付けさせられなかったのである。

#### 4. 南北朝正閏問題以降—大正デモクラシーへの対抗としての「楠公遺蹟」の教育的意義

1911年に南北朝正閏問題が起きた。1910年の大逆事件で、天皇暗殺計画の首謀者にでっち上げられた幸徳秋水が、検挙中に発言したされる「今の天子は南朝の天子を暗殺して三種の神器を奪い取った北朝の天子の子孫」という言が漏れたことが、直接の引き金となったとも言われる。また、日露戦争後における個人主義・社会主義思想の拡大の問題、桂太郎首相の強権的政治・官僚政府批判も加わって、大問題になった。1月19日付けの『読売新聞』に掲載された「南北朝問題、国定教科書の失態」と題する社説が口火をきり、大阪府選出の衆議院議員藤沢元造が桂太郎内閣に質問趣意書を提出した。その結果、北朝系統の明治天皇が南朝正統を勅裁し、教科書の改訂も行われることになった。南北朝並立の教科書を作った喜田貞吉を休職させ、『尋常小学日本歴史』では、「南北朝時代」が「吉野朝時代」に変更となり、足利尊氏は天皇に背いた「逆賊」・「大悪人」とされ、楠木正成や新田義貞は「忠臣」とされた。歴史学は国民「道徳」の下位に置かれ、歴史教育は国民「道徳」を教える「歴史物語」となった。

ドイツに留学し、1891年に帝国大学文科大学教授となっていた坪井九馬三は、1894年、「史学に就て」を著し、事実調査とそれらの考証・研究に基づく「純正史学」と、徳育に資することを目的として初等中等教育に当てられる「応用史学」の違いを論じていたが、「純正史学」より、「応用史学」が上位に置かれることになった<sup>35)</sup>。「万世一系」の「国体」のもとでは、「忠孝」をつくす道徳は不変なものでなくてはならなかったのだ。そのために、視覚に訴えて、「物語」を「史実化」させることのできる「楠公遺蹟」はますます重要なものになっていった。

1914年秋、大阪での陸軍特別大演習を統監するため、大正天皇が来阪することとなった。その天覧用として『大阪府写真帖』、『大阪府名所旧蹟案内』が発刊され、「北畠顕家墓」、四條畷神社、「楠正行墓」、「櫻井驛址」、楠正成生誕地、赤坂城址、千早城址、「楠正儀墓」、「楠正成首墳」等南朝の「忠臣」の史蹟は遺漏なく、紹介された。

1918年に米騒動が起きると、翌1919年3月、内務省による民力涵養運動が始まった。その五大要綱の最初の二点が、「立国ノ大義ヲ闡明シ国体ノ精華ヲ発揚シテ健全ナル国家觀念ヲ養成スルコト」、「立憲ノ思想ヲ明瞭ニシ自治ノ觀念ヲ陶冶シテ公共心ヲ涵養シ犠牲ノ精神ヲ旺盛ナラシムルコト」であった。具体的には「公民」教育の振興、青年団の結成、忠魂碑の建設などであった。この動きに呼応したのが、「村の鎮守」である民社を掌る「下級」神職（社司・社掌）などの勢力であった。彼らは、社会主義の広がりなど大正デモクラシーの諸運動に対する危機感、官社優遇の行政に対する反発があり、地域に密着した民社こそが国家的重要性を持つと認識していた。彼らは、地域での活動を活発化させ、敬神崇祖を通じ、「忠孝一本」を強調し、下からの臣民教化の積極的担い手として地域ファシズムを支えるようになっていく。「南朝遺蹟」、「楠公遺蹟」のある地域の神官は当然、その動きの中心を担った<sup>36)</sup>。

1919年4月に「史蹟名勝天然紀念物保存法」が制定され、内務省がその管轄に当たることになった。保存要目の一つに「重要な伝説地」、つまり、科学的根拠に乏しいが風教上価値ある史蹟が挙げられた。1921年3月に、「櫻井驛址」が「楠正成伝説地」として最初の史蹟指定の一つとなった。このとき、「伝説地」で指定されたのは櫻井のみであった。南朝正統論に大きな役割を果たし、「南朝史蹟遺物保存に関する意見書」を出した黒板勝美東京帝大教授は、「櫻井の別れ」は『太平記』上の物語に過ぎないが、幕末に「国民を感奮せしめた一の史蹟」として保存する必要を説いていた<sup>37)</sup>。さらに黒板は「立派な形を有する富士山も、この金剛山に匹敵することが出来ませぬ。いひ換ふれば国民の精神に大なる影響を与へて居る山は、恐らく金剛山が日本一であらう…日本の皇室に対する人の理想的人物とするのは、即ち楠木正成其人」とまで、楠木正成を持ち上げていた<sup>38)</sup>。その後、「伝説地」は6か所指定されたが、建武中興関係が5か所であった。ナショナリズムの形成に貢献するべき「史蹟」指定とはいえ、物的な遺構・遺物に基づく学術的史実に依拠することが原則であったのに、「南朝」だけが特別扱いを受けたのである。『太平記』によって作られた伝説が「応用史学」において、いかに教育的効果がある「史蹟」であったかを示すものであろう。

「純正史学」も、明治期と大きな変化を見せ始めた。考証史学（実証主義・科学主義）に代わり、新カント学派・西南ドイツ学派といった新しい歴史哲学が流行し始めたのである。阿部秀助慶應義塾教授は、ドイツ留学から帰った1912年12月に史学会の例会で「史学の根本問題（史学の客観性と史料の心理的意義）」と題して、南北朝正閏問題から説き起こし、「史学上の所謂客観性が頗る主観の要素に富んでゐる」、「因果律は吾人が認識の人為的手段であつて、外界に存在するものではない」、「吾等は自己研究上の

目的に適合する様に材料を現実界から選択する必要がある」、「歴史は価値系統に属するものであつて、決して法則的系統に属するものでないと思う」という講演を行った。史学の客観性を否定し、史学は主観でしか捉えられず、そのために歴史家の人格の必要性を指摘した<sup>39)</sup>。これは、後に「皇国史観」を支えることになる平泉澄東京帝大教授にも大きな影響を与え、大正文化史学へとつながっていく。平泉澄は、1926年に東京帝大助教授、1935年に教授になるが、彼は実証史学と文化史を融合させ、歴史の「物語」性を重視した。重野安繹らの学風を「科学的研究これである。その研究法は分析である。分析は解体である。解体は死である。」と批判し、「之に反し真を求むるは総合である。総合は生である。而してそは科学よりはむしろ芸術であり、更に究竟すれば信仰である。」とした。つまり、主観主義的な歴史によって、日本の固有性を語り、「真の日本人」を作ることが歴史学の目的であるとした<sup>40)</sup>。

先述した三上参次東京帝大教授は、南北朝正閏問題時には、両朝並立論の主唱者の一人であったが、彼も歴史の学術的意義〈歴史学〉と教育的意義〈国民教学〉を分けて考え、学術的価値〈保存〉より由緒的価値〈顕彰〉に重点を置き、国民教化を目指した。彼の有名なエピソードとして、1933年度の東京帝国大学文学部国史学科新入生歓迎会での発言がある。「諸君は大学を出て、教師になったとき、大学で学んだことをそのまゝ生徒に教えてはいけない。学問としての歴史と教育としての歴史はちがうのである。たとえば皇紀が六百年ばかりのびているということは、学問上は定説である。しかしいままで二千六百年と教えているから、それをいま、そうでないなどといつてはならぬ」と語ったのである<sup>41)</sup>。遅れた日本が欧米諸国に対抗するためには、ナショナリズムによる団結が必要であり、教育による歴史意識の共有こそが核心だと考えていたのであろう。

同年に著された橋本徳太郎の「金剛山と赤坂城址」では「千早神社は立派に出来たが、千早城は立派に破壊された」<sup>42)</sup>と事実の「保存」より物語の「顕彰」が進む現状を皮肉交りに批判したが、その流れを止めることはできなかった。

学者らによる上からの歴史教育とともに、歴史学・考古学の大衆化が進み、「郷土研究」が盛んになった。1930・31年度に、文部省が師範学校に郷土研究施設費を交付した。「郷土」を大切に思わせることにより、疲弊した農村の自力更生の精神を生み出させるとともに、教育の画一化の打破、地方の実情や児童の生活に即した教育を目的とした。1930年に、「郷土教育連盟」が発足し、文部省の地方研究を普及・促進させ、現実の郷土を正しく認識理解する「科学的郷土教育」を進めようとした。ただし、日中十五年戦争開始後の1932年末頃からは、「科学的」が影を潜め、愛郷心、ひいては愛国心涵養が主目的に変容していく<sup>43)</sup>。1932年11月に、雑誌『歴史公論』が発刊されるが、その巻頭言は「歴史研究はもはや一部のインテリ、ブルジョアの手から解放されて、一般大衆のものとならねばならぬ」とした。この年、昭和恐慌を受けて、自力更生を目指す農山漁村経済更生運動が始まっていたが、運動を担った中心は、「中堅人物」とよばれる村長、学校長、産業組合・農会役員などであり、隣保共助の精神の普及によって、村内の対立を緩和しようとした。この村の自立・団結を目指す運動に、村に「誇り」を持たせる郷土歴史教育運動も一役買ったのである。1933年には、「大阪府天王寺師範学校内郷土を語る会」が『大阪中心の郷土を語る』を発刊した。

では、この時期の南河内の様子から見ていこう。1914年、もしくは1915年に「楠公夫人遺蹟保存会」が創立され、東京と観心寺に事務所が置かれた。「楠公夫人」とは、正成の妻、正行の母であり、『太平記』では敗死した正成の首が赤坂に届けられた際に、正行が後を追って自刃しようとしたところ、天皇へ

の忠節と父への孝行を説き、正成の遺志をつがせたという説話で登場する。ところが、現実の「楠公夫人」は謎の人物である。1915年、「楠公夫人遺蹟保存会」によって発刊された織田完之の『楠公夫人伝』が楠木正成の妻を南江久子として紹介したが、資料的裏付けができない信頼性に乏しい話である。「楠公夫人遺蹟保存会」では、墓所の修理、楠妣庵観音堂の再建、記念碑の建設、婦人公會堂、及び婦人文庫の建設を掲げた<sup>44)</sup>。高等女学校生徒は1910年には193校56,239人、1915年には223校75,832人、1920年には417校154,470人、1925年に618校275,823人と急増していった<sup>45)</sup>。「忠臣」を支え、「忠孝の子」を育てた「良妻賢母」の代表的人物として、拡大しつつある「女子教育」の材料に使うにはうってつけであった。「楠公夫人」が「発見」されたのである。

富田林甘南備が「楠公夫人」の生まれの地とされ、正行の戦死後、その地に夫と子どもの菩提を弔うために楠妣庵観音堂が創建されたという。「楠公夫人」は、その観音堂で晩年を過ごし、死後にはその墓も作られたとされたが、廃仏毀釈の嵐の中、1873年に廃寺となり、その後建物も撤去されていた。檀原神宮や明治神宮などを設計した伊東忠太が、1917年に観音堂、草庵を創建し、楠妣庵観音寺として寺を「再興」した<sup>46)</sup>。

1918年には、千早村に「楠公顕彰会」が設立され、千早城跡に通じる橋および無料宿泊所の建設、道路整備などを行った。1922年に社団法人化し、本部を京都、支部を東京と千早村に置いた<sup>47)</sup>。1925年には、写真をふんだんに使用した『楠公千早遺蹟案内』を発刊した。

1921年には、大阪府が「此山頂千早城址」、「下赤坂城本丸址」、「此山頂上赤坂城址」の標石柱を立てた。1927年には、観心寺を本部にして、全国組織としての「大日本楠公会」が設立され、観心寺に思想善導の施設として、講堂・林間学舎、霊宝館の建設計画を立てた。1930年に、1928年の昭和天皇の京都における「即位の大典」時の饗宴の間を移築し、大講堂とした。同時に林間学舎も建設された<sup>48)</sup>。1932年には、「金剛山顕彰会」が結成され、金剛山名所旧蹟の顕彰とともに、林間学舎などの建設が始まった<sup>49)</sup>。

ただの過去を偲ぶ「遺蹟」ではなく、「忠臣」、「良妻賢母」となる精神修養の場と化していくとともに、地元で結成された組織が「村おこし」のために下からの運動を支えた。

他の地域も簡単に見ておこう。1921年に「櫻井驛址」が史蹟指定された島本村では、1928年5月、村長の提唱で村役場に事務局を置き、「櫻井楠公会」が結成された。「驛址」は村の名所であり、村をあげてその維持・顕彰に努め、村の活性化を図ることが会の趣旨であった。この年の秋、京都で「即位の大典」が行われ、それに間に合わすように、新京阪電鉄（現阪急京都線）の開通が迫っていたことも、村の活性化につながると認識したのであろう。翌1929年、「櫻井の別れ」の日とされる5月16日に「櫻井驛址」で第1回「楠公祭」<sup>50)</sup>が開催され、1944年まで続いた。

1931年5月、「楠公六百年祭建碑」として、「櫻井驛址」で「明治天皇御製碑」建碑除幕式が開催された。建碑出願者は島本村長、除幕式の主催は「櫻井楠公会」であり、3000人が参加した<sup>51)</sup>。明治天皇御製の「子わかれの松のしづくに袖ぬれて昔をしのふさくらゐのさと」を揮毫したのは、海軍の「軍神」東郷平八郎大将であった<sup>52)</sup>。碑は高さ520cm、巾210cm、厚さ25cmの巨大な物であり、1913年の乃木希典揮毫の「楠公父子訣別之所」碑と競うように並び立っている。陸軍の「軍神」と海軍の「軍神」が揮毫した巨大な石碑が並びたっているのは、日本全国でもここだけだと思われる。それだけ、「櫻井の別れ」の話は、兵士を作るための「教育的価値」があると思われていたのである。

神戸の湊川神社でも、1919年、1935年の「大楠公六百年祭」を目指して、境域の改修、本殿・社殿の改築を企画、寄付金の募集が始まった。1922年には、宮内省から3000円の下賜金、13全宮家から各500円の寄進が寄せられ、工事が始まった。1929年6月には、昭和天皇が参拝している。1932年には、さらに宮内省から1000円の下賜金、13全宮家と李王家から各300円の寄進がなされた。1935年4月、「大楠公六百年祭」に先立ち、改修工事竣工の奉祝祭が行われた。改修前は、境内に水族館、ビヤホールやおでん屋、ぜんざい屋などが建ち並び、猥雑な空間もあったが、改修後は、「境域亦全く浄化せられて森厳極みなき神域の出現を見た」のであり、より威圧的で厳粛な空間に変容を遂げた<sup>53)</sup>。

この時期、大逆事件、米騒動、大正デモクラシーといった動きに抗するために、天皇制イデオロギーを強化しなければならなかった。その基盤となるように、「郷土保護」が重要視され、「科学性」をまとわせた日本の歴史・文化の固有性が説かれた。「近代」西洋文化が自然や文化環境を破壊することに対して、日本「固有」の歴史的特徴を持った「史蹟」を通じて、郷土・国土の「景観美」を感じさせることによって、「国民性」を涵養しようとしたのである。その動きは、上からの政治的押し付けだけでなく、中央に認められ、つながりたい地域の名士、教育者、宗教者などがすそ野を広げながら、下からも支えていった。

また、1926年には松竹キネマ「大楠公」、二代目市川左団次の歌舞伎「楠木正成」が公演された。大衆社会の進展に伴い、映画、歌舞伎に止まらず、浪花節・長唄・舞台劇などでも楠木正成を頻繁に扱うようになり、1925年に放送開始されたラジオもそれらを流すようになった。一般民衆は、権威的な「国史」や「道徳」などの学習だけでなく、娯楽を通じて、視覚や聴覚などの様々な感覚から、楠木正成に親しむようになっていった。

## 5. 1935年「大楠公六百年祭」―「楠公遺蹟」の観光地化

1934年2月、中島久万吉商工大臣が1921年に執筆した「足利尊氏論」が「逆臣」を称えたとして問題となり、大臣辞任に追い込まれた。その翌月の3月に、「建武中興六百年祭」が開かれた。前年の1933年12月には、吉野朝関係15神社が主体となって、「建武中興六百年記念会」が設立されていた<sup>54)</sup>。

1934年10月、軍部が初めて思想・経済問題に言及し、しかも政治介入を公然と表明した軍事ファシズム体制を主張する陸軍省新聞班『国防の本義と其強化の提唱』、いわゆる『陸軍パンフレット』・『陸パン』を発刊して、大きな話題となった。その4か月後の1935年2月、天皇機関説問題が発生した。南朝の「忠臣」菊池氏の末裔で陸軍中将であった菊池武夫貴族院議員が中心となって、美濃部達吉の「天皇機関説」攻撃を開始、軍も後押しをした。8月に第一次国体明徴声明、10月に第二次国体明徴声明が出され、天皇は「現人神」、「帝国」は「皇国」となり、思想的な自由は失われた。個々の兵士に一点の疑いも抱かせず、任務に献身的奉仕をさせること、つまり、天皇のために戦い、天皇のために死ぬことが絶対的大義とされた。1937年の日中全面戦争開始直後に発表され、「第二国歌」とも言われるようになった「海ゆかば」では「…大君の辺にこそ死なめ願みはせじ」と歌われた。

その天皇機関説問題から派生した国体明徴運動が沸騰している5月に「大楠公六百年祭」が開催された。「建武中興六百年祭」より、大々的なイベントが開催され、人々は熱狂した。

1935年に入ると、各新聞社が「大楠公六百年祭」に向けた講演会・展覧会等を開催し、機運を盛り上

げていった。1月12日、大阪朝日新聞社が六百年祭記念事業のための協議会を開催、「大楠公を語る座談会」には、湊川神社禰宜、観心寺住職、金剛寺住職、四條畷神社宮司、葛木神社社司、楠妣庵住職、建水分神社社司など「楠公遺蹟」の寺社関係者、黒板勝美東京帝大教授、中村直勝京大助教授、魚澄惣五郎大阪府立女専教授などの「学者」、大阪史蹟調査委員会、大日本楠公史蹟河南八勝会、大阪府社寺兵事課などが出席した<sup>55)</sup>。3月7日・8日・9日には、大阪朝日新聞社が「大楠公講演会」を、京都・大阪・神戸で開催し、京都の講演会では平泉澄東京帝大助教授も講演した。3月23日～30日には、神戸新聞社が海軍省・文部省の後援で「大楠公展覧会」を神戸三越百貨店で開催し、会場正面には、湊川合戦のパノラマも飾られた<sup>56)</sup>。4月8日～18日には、大阪朝日新聞社が大阪朝日会館で、日本精神の作興に貢献するとして、「大楠公展覧会」を開催、16日には大阪府下の歴史教諭70名を集め、魚澄惣五郎府女専教授が講演した<sup>58)</sup>。

それでは、各地の「大楠公六百年祭」の様子を見てみよう。

まず、南河内では、1933年に文部省内に発足した「史蹟名勝天然記念物調査委員会」が、「建武中興六百年祭」式典の開催に合わせて、1934年3月に、下赤坂城址、上赤坂城址、千早城址、観心寺、金剛寺を国の史蹟指定とした。その委員には東京帝大教授の黒板勝美、三上参次、平泉澄らがなっていた。指定を祝って、史蹟巡りも行われ、その起点となる富田林駅頭と石川橋詰には緑色のアーチがかけられ、また富田林町内には菊水旗と日の丸の交差旗が掲げられ、千早村には造り物の武者人形が登場した<sup>58)</sup>。

史蹟指定を受けて、大阪府では1935年度から3か年継続事業として千早・金剛山整備に68万1千円をあてることになった。観光用道路の改修、修養道場として「存道館」の建設等が計画された<sup>59)</sup>。全国的に見ると、1934年に17か所、1935年以降に11か所の「南朝関係史蹟」が史蹟指定された<sup>60)</sup>。本州・九州全体に広がったわけで、それとともに各地で郷土史・地域振興・観光化と結びつき、「南朝」顕彰事業が行われるようになった。

1934年3月13日に、観心寺等で「建武中興六百年祭」が開かれ、7月には、観心寺の「大楠公馬上像」の除幕式が南河内郡52小学校の児童ら1000名を集めて開かれた。男女8名の児童代表が除幕を行った<sup>61)</sup>。その年末には、「楠公史蹟河南八勝会」が結成され、「楠公史蹟河南八勝」として「大楠公六百年祭」に合わせて、石碑を建立した。ちなみに、第一蹟天野山金剛寺、第二蹟楠妣庵観音寺、第三蹟檜尾山観心寺、第四蹟千早城址、第五蹟金剛山（六合目上）、第六蹟建水分神社、第七蹟楠公誕生地、第八蹟紫雲山葛井寺とされた<sup>62)</sup>。

1935年には、大鐵、南海電車ともに、「楠公遺蹟巡り」の地図・写真入りのハイキングガイドを作成した<sup>63)</sup>。新聞にも盛んに宣伝記事を掲載した。楠公生誕地・建水分神社から金剛山に直接登る登山路も整備された。鉄道省も、1934年から大々的なハイキングキャンペーンを展開しており、鉄道企業の収益だけでなく、上からの余暇の「健全」的組織化と戦争のための体格向上・保健衛生向上の狙いとも掛け合わされた。

1935年4月13日の『大阪毎日新聞』では「偉業を偲ぶ楠公遺蹟地巡り素晴らしいハイキング・コース」として観心寺、楠妣庵、河合寺、後村上天皇御陵、寄手塚身方塚、下赤坂城址、上赤坂城址、楠公生誕地、建水分神社、千早城址、金剛山、天野山金剛寺、吉野山を紹介した。4月21日の『大阪朝日新聞』でも一面全面を使って、同様な場所を紹介する「大楠公六百年祭 徂春行楽の第一線 大楠公六百年祭大楠公史蹟巡りは大鐵電車に乗って」という見出しをつけた広告記事を掲載した。南海電車も同様であっ

た。両社とも、記念絵葉書付きの割引乗車券を発行した。大阪府学務部内に置かれた大阪府史蹟名勝天然記念物調査委員会が発行した『大楠公六百年記念大阪府下における吉野朝遺蹟』にも、大鐵、南海はともにハイキングコースの地図をつけた広告を掲載した。

そのような動きを受けて、1935年4、5月に入ると長野駅に下車する「巡礼者」は日に2万人を数えるようになった<sup>64)</sup>。少し長くなるが、『大鐵全史』<sup>65)</sup>が描く当時の様子を引用してみよう。

「…昭和十年は大楠公湊川戦死の六百年祭に當り、長野驛を中心とする觀心寺、千早、赤坂、金剛山等の楠公遺蹟を弔ふ人々に依つて、當社線の乗客は又激増した。同年度上期のみに於ても此關係の團體客約七萬人、これに依る運賃の増収約三萬七千圓と推算せられ、一時的にせよ當社營業の殷盛に資するところ少くなかつた。

「楠公祭」の前後よりして日本精神の鼓吹、質實剛健の氣風涵養の氣運昂り、殊に昭和十二年支那事變勃發以後は、國民精神作興の運動が強力に展開せられるに至つた。此風潮に伴ひ皇陵、史蹟の巡拜及び所謂ハイキング等が盛んに行はれるやうになつたが、此事は沿線に多くの皇陵、史蹟を有つ當社線を自ら時代の寵兒たらしめた觀がある。勿論此種の乗客を誘引する爲めに、當社は沿線史蹟の宣傳、沿線山野の探勝に適當なるハイキング・コースの選定、道標の設置等に力を致すところがあつた。其コースの主要なるもの凡そ次の如くであるが、此試みが引續き數年世人の風潮に投じて當社の營業に幸ひしたことも亦、これを見逃すを得ない。…」

「…景氣の浮沈に業績を左右せらるゝ傾きの強かつた我大鐵が此好影響を全面的に満喫したことは當然に想像せられる。而も當社沿線に存在する名所舊跡は楠公の遺蹟と云ひ、吉野の櫻花、史蹟と云ひ、何れも大阪よりは比較的遠距離の地にあり…」

ハイキング・コースの「主要なるもの」の一つが「はじめに」で記したコースであった。また、「はじめに」の5月10～12日の大阪府聯合青年団だけでなく、さらに動員規模を拡大して青年団の全国組織である大日本聯合青年団でも、5月25日から29日にかけて、湊川神社→南河内→吉野→笠置山をめぐる「公が躬行実践せる精忠義烈の眞精神を体得」するため、「楠公史蹟巡歴講習會」を開催した<sup>66)</sup>。

「楠公史蹟河南八勝會」は、それぞれの「八勝」の地で記念行事を主催したが、その一つに、1935年4月8日、寄手塚、身方塚前で「大楠公赤十字祭」を開いた。寄手塚が身方塚より大きいというので、楠木正成が敵に対しても慈悲深い人間であり、この両塚こそが日本の博愛精神の源であつて、さらに世界赤十字思想の發祥地となつたというのである。日本人はその精神を引き継ぎ、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦等での日本赤十字の世界的評価を受けたという考えにもつながつた。重要行事として、翌年からも開催が続けられた<sup>67)</sup>。現在も、この主張を繰り返すマスコミ等があるが、そもそも、この寄手塚、身方塚を楠木正成が造立したかどうかの証拠もないし、『太平記』を読んでも分かるように、この頃や戦国期には戦争で死んだ者を、崇りがないように敵味方なく弔う習俗が一般的であり、敵の方がより崇るのであるから、大きく作るのは当たり前といへば、当たり前なのである。「慈悲」・「博愛」の精神とは無縁のものであろう。崇りを避けるために敵味方の戦死者を祀るという思想を、顕彰のために「英靈」として味方だけの戦死者を祀るという思想に変えたのは、楠公社・靖国神社である。

4月26日に、「楠公誕生地保勝會」、河南神職會共同主催で生誕地において「大楠公誕生祭」が行われ、小学児童が参拝させられた<sup>68)</sup>。5月5日に尾上信太郎の『史蹟赤坂と千早』が発刊された。5月25日の「大楠公六百年大祭」当日には、正成誕生地の近くで「大楠公六百年記念塔（奉建塔）」地鎮祭も行われ

た。25、26日の金剛山葛木神社の記念祭には、連日5万人以上の登山者があったと言われる<sup>69)</sup>。同じ、5月には楠岬庵に岩崎光仁作の「楠母子の像」も建立された。台座の銘は「與精神」であった。子どもに「忠孝両全」の「精神」を与えた「賢母」の像であった。

神戸では、1934年3月13日に湊川神社で「建武中興六百年祭」が行われた。続く、1935年4月～5月末に、「楠公六百年祭記念観光博覧会」が湊川公園と楠木正成が隠岐を脱出した後醍醐天皇を迎えたといわれる福巖寺、六甲山植物園を会場にして開催された。湊川公園の楠公館には、湊川の戦いや「櫻井の別れ」などの十場面がパノラマで展示された。歴史館では、横山大観の「大楠公像」も出展された。観光館、第二観光館では、日本各地の観光名所パノラマ・ジオラマなどが展示された。展示館では土産物が販売され、余興館も設けられた。市営バス・私営バスは、各会場への乗車券と観覧券をセットにした記念乗車券などを発売した<sup>70)</sup>。

4月21日には、六甲山頂の「大楠公馬上像」除幕式が行われた。この像は個人の寄贈であり、皇居前と同型であった<sup>71)</sup>。4月28日には、大阪朝日新聞社主催で、「大楠公六百年祭記念体操大会」が甲子園球場に1万2千人の参加者を集めて開かれた。代表者が湊川神社参拝後に開会式・演技が行われ、大規模集団体操が繰り広げられた<sup>72)</sup>。翌年からは、規模を拡大して「日本体操大会」として各地で開催し、「紀元二千六百年」の1940年は65万人、最後となった1943年には250万人が参加した<sup>73)</sup>。「楠公六百年祭記念観光博覧会」が開催中の湊川公園で、5月22日に、湊川の戦いのときの正成を模したとされる「大楠公銅像」除幕式が行われた。1934年6月に神戸新聞が計画発表・資金募集を開始し、全県下の学校の生徒・児童を含め、3万円の寄付によって、建立したものである<sup>74)</sup>。

「櫻井の別れ」があったとされる5月16日を前後して、神戸市内小学5年生2万名が湊川神社に参拝させられ、「忠孝両全の誓詞」を朗読させる「菊水祭」を行い、その後も毎年行われるようになった。その日は、神戸市内の全60小学校の屋上に、楠木正成が掲げたとされる伝説上の「非理法権天」と記した菊水旗を掲揚し、「青葉茂れる」を歌い、楠公にちなむ講話や劇を行った<sup>75)</sup>。

5月25日の「楠公六百年祭大祭」当日は、街には花電車・花自動車も繰り出し、神輿を中心に武者行列3000名が3kmの列をなして練り歩いた。湊川神社参拝者は50万人を数えた<sup>76)</sup>。

「櫻井驛址」でも、1934年3月13日に「櫻井楠公会」が主催して、「建武中興六百年祭」が開かれた。一年後の「大楠公六百年祭」に向けて、5月には、「櫻井楠公会」の事務所が村役場から「驛址」に移転し、新京阪鉄道も「上牧櫻井ノ驛」駅を開業、「櫻井驛址」までの道路も整備され、櫻井に因んで、桜並木が作られた。1935年2月から、付近の五領小学校が、「櫻井の別れ」の日に当たる毎月16日朝6時頃に学校集合の後、3km離れた「櫻井驛址」の参拝を開始、校長の訓話後に清掃奉仕をした<sup>77)</sup>。地元の島本小学校もいつからかははっきりしないが、毎月16日の1時限に全校生徒が「櫻井驛址」に学校から参拝し、校長の訓話の後、「青葉茂れる」を合唱、清掃奉仕をした。島本小学校の校訓は楠公精神、校章は菊水紋であった。島本小学校でも、楠岬庵の「楠母子の像」を制作した岩崎光仁によって、1938年5月に「楠公父子別れの銅像」が完成し、除幕式があげられた。島本青年学校教員と島本小学校の11歳児童がモデルになっており、台座の銘には、『教育勅語』の一節である「克忠克孝」が刻まれた<sup>78)</sup>。

5月16日、「櫻井驛址」で「楠公父子訣別六百年祭」が開催された。2000人が参列し、付近の淀川河畔では、高槻工兵第四大隊が爆破演習を行った。当日、櫻井がある三島郡内36小学校に菊水旗が授与され、各校は国旗掲揚台に掲揚した<sup>79)</sup>。

ちなみに、「大楠公像」、「楠公父子像」が学校に設けられるようになったのは、1932年10月、八尾中部小学校の「大楠公像」が最初と思われ、「大楠公六百年祭」を契機に、児童を含めた寄付金が集められるようになり、1936年から急増した。「紀元二千六百年」の1940年がピークで、大阪では68校に「楠公像」設置が確認されている。その他に石像などが9校あった<sup>80)</sup>。八尾高等女学校では、1938年に「大楠公久子夫人銅像」が造立された<sup>81)</sup>。「楠公像」は学校で奉安殿に次ぐ礼拝の対象になっていった。また、「楠公像」の前で剣道の練習なども行われた<sup>82)</sup>。

学校に多く置かれた像のもう一つである二宮金次郎像が、最初に学校に置かれたのは1924年、急増するのは1932年の農山漁村更生運動の開始後である。

1937年3月、児童の寄付などで作られた布施第四小の「大楠公馬上像」を朝鮮人が盗みだし、破壊、古物商に売る事件が起こった。新聞等で大々的に報じられ、朝鮮人の「非道徳性」が大きな問題となった。当直訓導は辞表を提出（最終的には却下）した。同校にいた朝鮮人児童100名への差別を恐れ、大阪では著名であった李漢明・李善洪が朝鮮人代表として、児童900名の前で朝鮮人の「無知」を謝罪、朝鮮人への献金を呼びかけ、迅速に再建した。楠木正成を知らなかった朝鮮人「犯人」には、懲役2年1人、1年6月2人、10月1人（古物商）の実刑という厳しい判決が下された。この事件は、在日朝鮮人に一大恐慌を引き起こし、「楠公像」の写真を配ったり、様々な「楠公運動」等を行うなど、朝鮮人「皇民化」政策に大きな役割を果たした<sup>83)</sup>。

1935年5月4日には、大阪城南西の歩兵第37連隊（菊水連隊）営庭に「大楠公像馬上像」が設けられ、除幕式も行われた<sup>84)</sup>。「櫻井驛址」に近い大日本紡績山崎工場の正門にも、1940年9月に「大楠公馬上像」が設けられた<sup>85)</sup>。

この時期の史蹟は学術的・文化的価値、保存より、由緒的価値、顕彰、話題性・娯楽性、経済性資源がより重要視されるようになったことが読み取れる。史蹟来訪者にとっては話題性・娯楽性が、迎える側にとっては収益を生む経済性が期待されるようになった。上からの押し付けがなくても、ローカルな地域が主導権を持ち、顕彰的記念物を作り、観光地化していったことによって、さらに多くの人が「楠公遺蹟」を訪れ、それがナショナルな「教育」的効果を上げるという循環を生んでいった。

## 6. 「大楠公六百年祭」以後—「楠公遺蹟」と精神修養

「大楠公六百年祭」以降、敗戦までの各地での「楠公顕彰」の変化の様子を見ていこう。

「国体明徴声明」が出された1935年頃から、天皇を中心とした「家族国家」が強調され、家族—愛郷心がさらに「家族国家」—愛国心と強く結びつけられていった。1937年3月、文部省「師範学校教授要目」が改訂され、制度・規定上でも愛郷心・愛国心の涵養を目的とする観念的「日本精神涵養運動」に変質した。1937年7月、「国民精神総動員運動」が開始され、「滅私奉公」の精神が強調、「紀元二千六百年」に向けた「聖蹟顕彰運動」などに具体化していった。1939年には、大阪府池田師範学校が『史学研究』第4巻として『楠公研究』を発刊した。

1906年に結成された修養団は労働を神聖化し、実践を重視する社会教育団体であった。ある／ないという教養よりも、する／しないという精神修養を重んじ、労働・生産・禁欲に価値を置いた。瞑想・偉人崇拜の精神の涵養・流汗を三大主義とした。大正デモクラシーや労働争議に対抗し、勤労を搾取・苦痛で

はなく、和合・歓喜として捉えようとする「日本精神」の普及を図り、天皇を賛美したため、住友財閥をはじめ、企業に多くの支部が設けられ、アジア太平洋戦争中には600万人以上の団員を数えたと言われる。その修養団も1936年8月21～25日に、ジャワからの11名も含み、20代、30代の従業員・店員・工員を中心とした189名が参加して、「修養団千早城址男子天幕講習会」を開催した。講演・感話・奉仕作業など以外にも、朝の行事として千早神社参拝・金剛山登山が組まれた。9名の講師の中には、千早村多聞小学校校長もいた<sup>86)</sup>。

1936年11月、大楠公精神の修養道場として、千早神社近くに「楠公道場」とも呼ばれた府立「存道館」が完成した<sup>87)</sup>。館名の「存道」は真木保臣の「楠子論」から取り、文武兼修のためとして、文館と武館が設けられた。館長には平泉澄がなり、竣工祭にも出席し、「存道館記」を著した。「世ノ英豪偉材ヲシテ深く楠公ノ大精神ニ向慕セシメ、思想紛乱ノ中ニアツテ正シク 皇国臣子ノ大道ヲ確立シ、功利誘惑ノ時ニ於テ先哲忠烈ノ意氣ヲ継承シ、之ヲ明カニシ、之ヲ弘メ国家ヲ無窮ニ護持シ奉ラン」ために、1～3泊の講習会が行われた<sup>88)</sup>。

1937年1月には、「楠公夫人」生誕地とされる山間の富田林甘南備に、婦徳修養道場「南江寮」が開館した。その隣接地に、1939年1月、「紀元二千六百年記念事業」として楠母神社の創建が計画され、1940年8月に竣工、11月に正遷座祭が行われた。楠母会長には元首相の阿部信行陸軍大将がなった。翌年5月10～18日に第1回若葉祭が開催され、初日には、当時留守第四師団長として赴任していた朝鮮王朝最後の皇太子李王垠の妻、梨本宮方子が、阿部会長の出迎えを受けて参拝した。その際に、方子は「楠母」を称える歌を色紙に認め、楠母会に下賜したが、大日本国防婦人会関西本部がその歌碑を作って、神社本殿前に建立した。若葉祭の開催中の8日間で、国防婦人会・愛国婦人会員1万名を参拝させた<sup>89)</sup>。

1940年には、建水分神社の摂社として、楠木正成を祀る南木神社が再建された。全国の学校の職員生徒の献金、地域の学童の勤労奉仕などにより、「生誕地」の近くに「大楠公六百年記念塔（奉建塔）」もほぼ完成し、「紀元二千六百年祭」に合わせて竣工式も行われた。高さは楠木正成の死亡年齢とされる43歳に合わせて、43尺（約13m）とされ、正面には「非理法権天」が刻まれた<sup>90)</sup>。

また、この年の4月に、元々は1896年に大阪城大手前で開校し、1922年に軍縮で廃校になっていた大阪陸軍幼年学校が南河内郡千代田村（現河内長野市）に再興された。朝な夕なに金剛山を眺めて「楠公精神」を学ぶ地として、選ばれたのである<sup>91)</sup>。

1941年4月には、南河内に一周35kmのハイキングコースからなる「楠公遺跡巡拝路」が、計画より2年遅れて、竣工した。軍需景気に沸く1937年頃には、ハイキングコースではなく、府営遊覧バスを走らせる計画だったが実現せずに、戦況悪化に伴い、精神鍛錬のためのハイキングコースになったようである<sup>92)</sup>。これは、厚生省が主導して行うことになる「健兵健民運動」の体力錬成と繋がっていく。金剛寺では、1943年5月に「楠公祭」が、「金剛寺護持会」により新築された修養道場「金剛閣」で行われた<sup>93)</sup>。

櫻井では、「紀元二千六百年」に向けて、1937年5月に、大阪の財界人を網羅し、十数万円を投じて、「櫻井驛址」の境内を2000坪に拡張する計画が立てられた。その趣旨書である『楠公父子訣別之処 櫻井驛址修理拡張に就て』<sup>94)</sup>では、「虚飾、俗化、遊園地的ニ流ル、コトヲ避ケ寧ロ鈍重ニ傾クモ、史蹟ノ聖地トシテ努メテ崇高森厳ヲ保チ、訪フ者ヲシテ肅然感激以テ、眞ニ心カラ楠公父子ノ忠孝ヲ偲ブノ思ヲ喚起セシメンコト」とするとされた。

1938年5月16日には、「櫻井驛趾」で小楠公ゆかりの「十一まゐり」が開始され、「父子別れ」のときの正行の年齢とされた数え年11歳の小学生が「楠公さんをお手本に立派な日本人になります」という宣誓文に署名した<sup>95)</sup>。北河内でも、1940年12月12日に、郡内32小学校の1500名の児童が四條畷神社に参拝し、宣誓文を奉納する「小楠公十一歳祭」が行われた。翌年も菊水少年祭として3000名を集めて開催されている<sup>96)</sup>。

1938年8月18日には、「紀元二千六百年記念・櫻井驛趾拡張改修工事」地鎮祭が行われ、本格的な工事が始まり、中学生、小学生、青年団、処女会など多数が勤労奉仕させられた。作業の開始、終了時には、四條畷神社遥拝が行われた<sup>97)</sup>。

1939年4月2日には、近衛文麿元首相が「櫻井驛址」を訪問した。同年5月16日には、新京阪鉄道から「櫻井驛址」へ最短距離の場所に「櫻井ノ驛」駅（現水無瀬駅）が開業し、「驛址」と一直線に結ぶ「楠公道路」も造成され、道の両側には「楠公」にちなんで樟（楠）が植えられた。1940年1月1日には、講堂として「麗天館」の新築工事も開始した。また、1月29日、「櫻井ノ驛」駅前に、京阪電鉄が経営する青葉公園の造営工事も開始された。遊歩道や花壇も整備されたが、施設の中心は軍事教練を行えるグラウンドであり、青少年に「楠公精神」をもって教練をさせようというのであった。

9月5日には、在郷軍人会大阪支部の「紀元二千六百年記念事業」として建設が進められた「櫻井ノ驛実弾射撃場」の竣工式が行われ、徴兵前の青少年の訓練に使われたが、その射撃訓練前後には「櫻井驛址」に参拝した。

1941年5月18日には、青葉公園で皇居前広場と同型である「大楠公馬上像」の除幕式が行われた。台座の「滅私奉公」の揮毫は近衛文麿であった<sup>98)</sup>。1942年5月16日、第14回「楠公祭」に合わせて、「櫻井驛趾記念館」として「麗天館」が落成し、玄関の扁額も近衛文麿が揮毫した。島本町立歴史文化資料館として、現存している<sup>99)</sup>。

湊川では、「南京陥落祝賀大会」と同日の1937年12月12日に、湊川神社正門前に高さ11mの日本一の石製の大鳥居が竣工した。楠公同族会会長で湊川神社に対する大口寄付者であった山下太郎<sup>100)</sup>が10万円を寄贈した。しかし、翌年8月30日に大崩壊し、現在、残された基台部分に「湊川神社」の文字が刻まれ、門柱として利用されている<sup>101)</sup>。

1937年1月31日には、南河内を地元にする富田林中学が、櫻井を地元とする茨木中学・四條畷を地元とする四條畷中学に呼びかけ、三中学主催で大阪の「楠公遺蹟」を辿る大阪府立中学対抗「楠公史蹟巡歴駅伝競走」が開始した。翌年からは他の参加校も加えて、毎年、厳寒期に開催されるようになった。スタート：櫻井驛「楠公父子訣別之所」碑→四條畷神社→伝応神陵→赤坂・千早城趾→ゴール：観心寺門の距離67kmで、優勝旗の授与は観心寺「大楠公馬上像」前で行われた。1943年からは主催が大阪中等学校報国団に変わり、参加校が急増し、開催も年2回になった。1943年2月の第一回は21校で開催され、1944年5月の第三回は70校1000人で開催される予定と報じられた<sup>102)</sup>。

1935年に、「紀元二千六百年祝典準備委員会」が発足し、楠公に関わるものとして、「櫻井驛趾」拡張改修工事、楠母神社造営、「櫻井ノ驛」実弾射撃場などを挙げてきたが、天満橋の八軒屋浜船着場西側の大川川縁には、大阪市東区教育会が「紀元二千六百年」記念として、渡辺橋に溺れる敵兵を助け、手当をして衣服を与えて敵陣へ送り帰したという、これも事実とは思えない『太平記』上の作り話を下に、「小楠公義戦之跡」碑も創建している。畿内では、「楠公」関連工事以外に橿原神宮拡張工事、大阪護国神社

造営工事などが行われたが、いずれの工事にも多くの地域の児童、生徒、住民たちが勤労奉仕させられたことが特徴として挙げられよう。参加・体験型の「皇国臣民化教育」であった。戦線の拡大・悪化に伴い、「楠公遺蹟」の娯楽性は影を潜め、苦しいことを我慢する精神修養の場、また軍事的教育の場と化していったのである。ちなみに、1936年に「史蹟名勝天然記念物調査委員会」が改変されたときに、臨時委員に佐竹保治郎陸軍少将が加わっており、軍が「史蹟」にまで、口出しをするようになったことが窺える。また、親が召集されることが多くなるにつれ、子どもたちへの教育対象として、楠木正行の重要性が増していったことも読み取れる。

さらに戦況が悪化した1943年以降の様子をたどって見よう。1941年1月に「金属類特別回収要綱ニ関スル件」、1943年3月に「銅像等ノ非常回収実施要綱」が閣議決定され、各地の銅像も金属供出の対象となっていった。楠公像も、皇居前広場の「大楠公馬上像」を除き、対象となっていった。櫻井では、1943年春に青葉公園の「大楠公馬上像」が「応召」になった。同年3月には、大日本紡績山崎工場の「大楠公馬上像」も「応召」になった<sup>103)</sup>。6月25日には島本国民学校の「楠公父子別れの銅像」が「応召」になって、遷座祭が挙行された。供出した跡には、代わりに「米英撃滅のため楠公父子は出陣された。時局は非常に重大だ。僕たちも楠公父子に続きませう」と立札が立てられた。その翌日には島本国民学校高等科2年生16名が陸軍少年兵学校への志願を申し出た。ただ、同校にあった二宮金次郎像は既に前年の9月29日に供出されており、楠公像の方が重要だったことが窺える<sup>104)</sup>。同年12月11日には青葉公園の馬上像台座に「楠公父子別れのセメント像」を建立、除幕式が行われた<sup>105)</sup>。元は「大楠公馬上像」であったのに、「父子別れの像」に変わったのは、馬上像はセメントでは造形できなかったためと思われる。

同じ頃、この櫻井では、地元島本町をはじめ三島郡教育会から、敵国人の顕彰碑文であるパークス碑の撤去を求める声も上がった。「櫻井驛址」が少国民の錬成道場などとして利用されている今日、かかるものが残されているのは聖地にふさわしくないばかりか、米英撃滅に当たる勇士にも申し訳ないというものであり、島本町は文部省に碑石の撤去、もしくは碑文の抹消を陳情することになった<sup>106)</sup>。また、銅像に代わる楠公の顕彰物も作られ始めた。例えば、茨木国民学校では、1943年1月、講堂内に、正成・正成夫人・正行を祭神とする「楠公神殿」を建設、講堂を「楠公道場」として子どもの錬成場とするとともに、全教職員が授業前に礼拝することになった。さらに、翌1944年の正成戦死の5月25日に、「非理法権天」を刻んだ「楠公顕彰碑」の除幕式を行い、引続き記念運動会を開催した<sup>107)</sup>。

1943年、戦前期の最後の国定教科書『初等科国史』が発行された。最後の章は「昭和の大御代」であり、その締めくくりは、「天皇陛下の御ために」と題された靖国神社の社殿の挿絵とともに、「私たちは、楠木正成が、櫻井の里で、正行をさとしたことを、よくおぼえてゐます。『…敵寄せ来れば、命にかけて忠を全うすべし。これが汝が第一の孝行なる。』…私たちは、一生けんめい勉強して、正行のやうな、りっぱな臣民（1944年版では忠臣）となり、天皇陛下の御ために、おつくし申しあげなければなりません」とされた。

『初等科音楽』にも唱歌「小楠公」が収録されるようになり、「…生きて帰らじこの門出…花とは散れど、永き世に光りかがやくそのいさを」との歌詞が躍った。『初等科国語』にも「櫻井の驛」、「母の教え」、「吉野参内」と正行に関わる話が収録され、挿絵に「櫻井驛址」の「楠公父子訣別之所」碑の写真が使われた。楠木正行が子どもたちの目指す究極の人物とされたのである。

2016年に公開されて大ヒットしたアニメ映画『この世界の片隅に』の中で主人公すずが作り、食べた

姑のサンに「あれを喜んで召し上がる楠木公はほんまの豪傑なんじゃろうねえ」と語らしめ、さすが「ほおですねえ」と返したことで有名になった「楠公飯（楠公炊き）」は、1944年2月から全国推進運動に入った。このような当局の戦時生活指導の一つであった節米や節燃料の米の炊き方は、1943年の「国策炊き」から始まり、「必勝炊き」となり、最後がこの「楠公炊き」であった。大楠公の精神と軍略と軍飯の三つで米英撃滅に当たれというのである<sup>108)</sup>。

戦況の悪化に伴い、楠公父母子の重要性はさらに増し、先述した「楠公史蹟巡歴駅伝競走」にも見られるように、1944年になっても楠公関係の行事には大動員が計られた。1944年2月27日には、大日本学徒体育振興会関西地方支部が京阪神の女学校21校、6500余名を集めて、各学校から「櫻井驛址」・青葉公園に向けて、「冬季心身鍛錬女子学徒集団行軍錬成会」を行い、さらに、後鳥羽上皇を祭神とする近くの水無瀬神宮に参拝、皇軍の武運長久祭を行った<sup>109)</sup>。

1944年4月25日～5月25日には大楠公奉賛会主催、大政翼賛会後援で「一億楠公誕生運動」、5月25日～31日には大政翼賛会が「大楠公顕彰運動」を起し、「大楠公の七生滅賊の精神、大楠公夫人の婦徳、小楠公の忠孝」を顕揚した<sup>110)</sup>。「楠公精神」に逆転の可能性を託したのであった。10月には、第1回神風攻撃隊として、大和隊・山桜隊・菊水隊が特別攻撃を行ったが、「七生報国」の精神が強調された。続く11月には第1回「回天」攻撃隊の菊水隊が出撃したが、幟に「非理法権天」が使われ、本体に「菊水紋」が描かれた。1944年11月16日、「櫻井驛跡」で大阪新聞社三島支部主催の「楠公生誕六百五十年祭並必勝祈願祭」が開かれた。

1945年1月の『週刊少国民』（朝日新聞社）新年特別号の表紙は楠公父子像の絵であった。3月末から、「本土決戦」準備のための「捨て石」作戦として、沖繩戦が始まったが、海軍は4月6日の菊水一号作戦から6月22日の菊水十号作戦までの特攻作戦を行い、2000名以上の若者の命を散らせた。その最中の5月8日には、「大楠公奉賛会」の「一億総楠公精神運動」が始まり、5月25日からは「楠公精神強調週間」と、逆転を賭けて「楠公精神」が説かれたが、その精神も通じずに8月15日、日本の敗戦で戦争は終わった。戦争末期には、戦争遂行のため、「楠公一家説話」は、民衆・地域の手を離れ、再び国によって回収されていったのである。

## おわりに

江戸末期に、後期水戸学により、「忠臣」楠木正成が「発見」され、殊に吉田松陰が信奉したことにより、幕末の「志士」、明治の「元勳」の間にも、楠公「信仰」が広がった。明治期になると、明治天皇も「臣民道徳」教育の要として、「忠臣」楠公を崇拜し、湊川神社の創建や皇居前広場の「大楠公馬上像」の造立を進めさせた。明治初期には、「楠公遺蹟」の場所に神社や石碑が建立され、「楠公遺蹟」が可視化されるようになった。

日清戦争において、日本は「近代国民国家」へ大きく歩を進めるが、「楠公遺蹟」を持つ地元民衆の間にも「楠公遺蹟」に対する関心が高まり、上からの「臣民」教化の動きと連動して、「楠公遺蹟」を整備して、人々を「遺蹟」に向かわせる動きが始まった。

明治末の南北朝正閏問題を通じて、歴史教育は国民「道徳」を教えるための「物語」と化していった。『太平記』による「拵え話」で、全く歴史的根拠がないとされていた「櫻井驛址」が真っ先に史蹟指定

されたのも、そうした流れに沿ったものであった。また、地域の有力者による郷土教育は「愛国心」や「村おこし」と結びつきながら、下からの「臣民」教化を進めた。1910年代半ばには、「楠公父子」だけではなく、「楠公夫人」も「発見」され、「良妻賢母」教育に資した。また、「楠公遺蹟」は一時的な視覚に訴えるだけのものではなく、そこに留まって精神修養をする施設も伴うようになっていく。

1935年の「大楠公六百年祭」は、前年の「建武中興六百年祭」を遥かに上回る規模で行われた。天皇である後醍醐天皇よりも、「忠臣」楠木正成の方が重要になったのである。南河内では、大鐵・南海の鉄道会社によって「楠公遺蹟」巡りのハイキングコースが設定され、「臣民」教育の場だけではなく、レジャーの場所ともなっていた。都会である湊川でも、祭りの当日には3000人の仮装行列が街に繰り出し、花電車・花バスが運行し、市民50万人以上が祭りに酔いしれた。また、この時期から、多くの学校に「楠公像」が作られ、奉安殿に次ぐ崇敬の対象となり、児童は登下校時に「楠公像」に向かって礼拝をするようになった。この頃の尋常小学校高学年、高等小学校在籍の児童たちが、アジア太平洋戦争末期の戦闘を支えていくことになり、多くの死者を生んだ。

日中全面戦争が始まる頃になると、「楠公遺蹟」の娯楽性は消えていき、「遺蹟」の整備・拡張への参加・体験を通じて「楠公精神」を学ぶとともに、精神修養のための施設がさらに拡充していった。戦況が悪化する1943年以降は、「楠公像」の金属供出すら、児童への教育に使われ、戦況逆転のための「楠公精神」が強調され、子どもたちには「楠木正行」になることが究極の目標とされたが、それも空しく、戦争は終わった。

戦後の1948年、GHQの指示により、明治天皇「聖蹟」377件が、ナショナリズムを支えたということで、史蹟指定を解除された。それにも関わらず、歴史的事実に基づかない「伝説地」に過ぎない「櫻井驛址」など、ナショナリズムの形成に大きく「貢献」した「楠公史蹟」は指定を解除されることはなく、日本政府も検討することはなく、歴史研究者も問題にできなかった。

その一方で、「楠公一家」は「道徳教育」では取り上げられなくなった。「歴史教育」においても、現在、高校日本史教科書で最も使用されている山川出版社『詳説日本史 B』（2014年）では、「後醍醐天皇の皇子護良親王や楠木正成らは、悪党などの反幕府勢力を結集して蜂起し、幕府軍と粘り強く戦った。」「南朝側では動乱の初期に楠木正成・新田義貞が戦死するなど形成は不利であった」と記されているにすぎない。「櫻井の別れ」、「七生報国」や正行の記述などの「物語」は消えていった。

しかし、最近、戦前期と同じように、地域おこしと絡めて、「『公』に尽くした楠公一家」の「復権」を図ろうとする政治的な動きが顕在化してきたことには注目しておく必要はあろう。特に人口減に悩んでいる自治体が熱心に活動しており、地域の大学と連携している自治体もある。日本が幾多の困難な時期を乗り越えてこられた／乗り越えていくのは、「楠公精神」を代表とする「滅私奉公」の犠牲的精神であるとするのである。新自由主義史観系の育鵬社『中学社会 新しい日本の歴史』（2020年）では、楠木正成の「肖像画」も入れたコラムを作り、「河内（大阪府）の豪族。戦いにすぐれ、後醍醐天皇のために戦い続けたことから、のちに「忠臣」とたたえられた。」と記している。前回の2015年の教科書採択で、「楠公遺蹟」のある自治体では、「郷土学習の観点から楠正成が取り上げられている」という理由でこの教科書を採択しているところが多かったが、今回の2020年の採択では、前回の首長主導の強引な採択方法が批判を受けたこともあったのであろう、採択は激減した。

本稿では、教科書での「楠公一家」の扱い方の変化には言及することができなかった。稿を改めて、発

表したいと思う。

#### 注

- 1) 『大鐵沿線名勝と史蹟』大鐵新聞社、1940年
- 2) 『大阪朝日新聞』1935年5月11日
- 3) 『癸丑遊歴目録』『吉田松陰』全集9巻、1974年所収
- 4) 上田孝治「幕末長州藩における楠公崇拜の思想－吉田松陰と楠公」『藝林』第35巻第3号、1986年所収
- 5) 真木保臣は「祭楠公」と称していた
- 6) 神霊を祭る個人碑のこと
- 7) 小林卷三他『招魂社成立史の研究』錦正社、1969年  
久保田収「真木和泉守の史観と楠公」、『神道史研究』第12巻第2・3・4号、1964年所収  
岩田重則『靖国神社論』2020年、青土社
- 8) 『忠臣』は1884年文部省音楽取調掛編『小学唱歌集』第三編に所収  
櫻井雅人「唱歌集の中の外国曲－『小学唱歌集』を中心として(2)」『言語文化』第42号、2005年所収
- 9) 現在の兵庫県ではなく、新政府に接収された旧幕府領の知事
- 10) 森田康之助『湊川神社史・下巻(鎮座編)』1987年  
尾谷雅比古「明治期における地域の楠公顕彰」『近代天皇制と社会』思文閣出版、2018年所収
- 11) 『郵便報知新聞』1874年11月5日号付録  
『朝野新聞』11月7日
- 12) 大熊権平『大楠公奮忠事歴』1915年、『千早赤阪村誌』資料編、1976年所収  
前掲「明治期における地域の楠公父子顕彰」  
現在も楠木正行の「墓所」と称しているところには、京都市右京区宝篋院の首塚、京都府宇治市六地藏正行寺の首塚、東大阪市山手町の首塚、東大阪市六万寺町の六萬寺の胴塚などがある
- 13) 大阪府社会事業会館『大阪府社会事業沿革史』1940年
- 14) 『東京教育雑誌』第123号、1899年－この資料については現物を閲覧できなかった  
齋藤智志『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』2015年、法政大学出版局の第七章「三上賛次の史蹟保存論」より重引
- 15) 「三上博士の時局講話」、『史学雑誌』第15編第7号、1904年所収
- 16) 『大阪朝日新聞』1899年7月5日
- 17) 観心寺霊宝館蔵・現在は重要文化財
- 18) 『大阪府会史』第二編、1910年
- 19) 『大阪府史蹟調査委員会報』第1号、1916年
- 20) 『河内長野市史』第三巻、2004年
- 21) 楠氏紀勝会『楠氏遺蹟志』1903年
- 22) 石碑には1901年11月建と刻まれている
- 23) 前掲『河内長野市史』第三巻
- 24) 『富田林市史』第3巻、2004年  
『富田林高校百年史 1901～2001』2002年
- 25) 『大阪朝日新聞』1905年8月15日
- 26) 前掲『大阪府史蹟調査委員会報』第1号  
楠公誕生地保勝会会長『寄付金品募集許可御願』・大阪府公文書館蔵
- 27) 関西大学蔵
- 28) 1909年に高槻に移転してきていた
- 29) 伊豆凡夫「嗚呼大楠公櫻井驛趾建碑に就いて」『護国の神大楠公』精神運動社、1936年所収  
『大阪毎日新聞』1911年3月11日

- 30) 藤巻正之『湊川神社六十年史本編』1939年
- 31) 前掲『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』
- 32) 嵯峨敏全『皇国史観と国定教科書』かもがわ出版、1993年の付表「国定教科書目次表」
- 33) 牧知宏「楠公銅像の献納について」『住友史料館報』第46号、2015年所収
- 34) 『読売新聞』1896年5月3日
- 35) 『史学雑誌』第5編第1号、1894年
- 36) 畔上直樹『「村の鎮守」と戦前日本』有志舎、2009年
- 37) 黒板勝美「史蹟遺物保存に関する意見書」『史学雑誌』23編5号、1912年所収
- 38) 『大阪府史蹟調査委員会会報』第4号、1917年
- 39) 「史学の根本問題（史学の客観性と史料の心理的意義）」『史学雑誌』第24編第1号、1913年所収
- 40) 平泉澄「歴史に於ける實と眞」『我が歴史観』至文堂、1941年所収  
 平泉にとって、「真の日本人」とは「優れたる人格の意識した行動」を取ることができる人物であった。  
 1928年に、中村吉治（後に東北大教授）が東京帝国大学時代、卒業論文の指導を受けに平泉澄助教授を訪ねた。その時のことを、後年、中村自身が「私は百姓の歴史をやるといったら、えらく怒られもしないけれど、蔑視されちゃった。百姓に歴史はありますかというわけだ。何ですかと詳しく聞こうとしたら、豚に歴史はありますかとたまたみかけられて、それで次ということになった」と回想している（中村吉治「歴史と私－農民史への出発」『歴史手帖』第4巻第12号、1976年）。「文明」と「未開」の二分法であり、農民を「内なる未開」と捉え、楠木正成のような「英雄」だけが歴史を切り開けると考えていたのである。
- 41) 井上清『くにのあゆみ批判－正しい日本歴史』解放社、1947年
- 42) 『史蹟名勝天然記念物』第8巻第4号、1933年所収
- 43) 伊藤純郎『郷土教育運動の研究』増補版、思文閣出版、2008年  
 外池智『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究』NSK出版、2004年
- 44) 前掲『大阪府史蹟調査委員会報』第1号
- 45) 『学制百年史資料編』1972年
- 46) 前掲『富田林市史』第3巻
- 47) 『千早赤阪村誌』資料編、1976年
- 48) 前掲『河内長野市史』第三巻
- 49) 「雑報 金剛山の保存顕彰に就て」『史蹟名勝天然記念物』第8集第2号、1933年所収
- 50) 他の場所の「楠公祭」は戦死した5月25日である
- 51) 『大阪朝日新聞』1931年5月18日
- 52) 湊川神社の「明治天皇御製」碑は戦後の1955年に建立された
- 53) 前掲『湊川神社六十年史』  
 前掲『湊川神社史・下巻（鎮座編）』
- 54) 『大阪朝日新聞』1934年3月13日、14日
- 55) 『大阪朝日新聞』1935年1月13日
- 56) 『神戸新聞』1935年3月19日、25日、26日、27日
- 57) 『大阪朝日新聞』1935年4月17日  
 大阪朝日新聞社『大楠公展覧会目録：大楠公六百年祭記念』1935年
- 58) 『大阪朝日新聞』1934年3月13日
- 59) 『通常大阪府会速記録昭和九年』1934年
- 60) 尾谷雅比古「文化財保護行政の歴史と課題－南朝関係史蹟の指定経過から－」『日本史研究』673号、2018年所収
- 61) 『大阪朝日新聞』1934年7月13日  
 「大楠公」という台座の銘を書いたのは、1932年4月29日の第一次上海事変時に上海での「天長節」祝賀会のときに、尹奉吉が投げた爆弾によって片足を失った植田謙吉陸軍中将－当時戦時中に金属供出され、現在のものは戦後再建したもの

- 62) 前掲『河内長野市史』第三卷
- 63) 大阪府立中之島図書館蔵
- 64) 『大阪朝日新聞』1935年5月12日
- 65) 佐竹三吾監修『大鐵全史』近畿日本鉄道株式会社、1952年
- 66) 『大阪府教育百年史』第四卷資料編(三)1974年
- 67) 『大阪朝日新聞』1935年1月20日  
『大毎小学生新聞』1939年5月13日  
『千早赤阪村誌』1980年  
日露戦争時のロシア兵俘虜、第一次大戦時のドイツ兵俘虜に対しては、手厚く保護したことは有名だが、日清戦争時の清国兵俘虜は人々の見世物とされ、「蔑視」・「嘲笑」の的となった。詳しくは拙稿「日清戦争の清国人俘虜と『大日本帝国臣民』の形成」『旧真田山陸軍墓地研究年報7』2019年を参照のこと。
- 68) 『大阪朝日新聞』1935年4月27日
- 69) 『大阪朝日新聞』1935年5月27日
- 70) 『楠公六百年祭記念観光博覧会誌』、『歴史館出品目録：楠公六百年祭記念神戸観光博覧会』ともに1935年
- 71) 『大阪毎日新聞』1935年4月22日
- 72) 『大阪朝日新聞』1935年4月29日
- 73) 佐々木浩雄『体操の日本近代 戦時期の集団体操と〈身体の国民化〉』青弓社2016年
- 74) 前掲『湊川神社史・下巻(鎮座編)』  
『神戸新聞』1935年5月22日
- 75) 『少国民新聞』1941年5月17日
- 76) 大楠公六百年大祭奉賛会『大楠公六百年祭写帳帖』1935年
- 77) 『大毎小学生新聞』1940年2月18日
- 78) 『大阪朝日新聞』1937年5月11日、10月10日  
『写真がつづる島本小学校百拾年の歩み』1984年
- 79) 『大阪朝日新聞』1935年5月17日夕刊
- 80) 籠谷次郎「二宮金次郎像と楠木正成・正行像－大阪府小学校における設置状況の考察」『社会科学』58号、1997年所収
- 81) 大阪府公文書館蔵『碑表台帳大正元年～昭和17年』
- 82) 『目で見る豊中・吹田の100年』郷土出版社、1995年
- 83) 拙稿「一九四〇－四一年、大阪における李垠・方子・玖の生活とその後の李玖の人生」『在日朝鮮人史研究』46号所収、2016年所収
- 84) 『大阪朝日新聞』1935年5月5日夕刊
- 85) 大阪府公文書館蔵『形像及碑表台帳大正元年～昭和18年』
- 86) 修養団・修養団写真班『第七十回修養団男子天幕講習会記念』1936年
- 87) 千早城の曲輪跡、元大阪府立千早山の家、現在非公開
- 88) 『大阪府教育百年史』第一巻概説編、1973年  
前掲『千早赤阪村誌資料編』
- 89) 前掲「一九四〇－四一年、大阪における李垠・方子・玖の生活とその後の李玖の人生」
- 90) 『大阪朝日新聞』1939年8月19日、1940年8月23日
- 91) 阪幼会『大阪陸軍幼年学校史』1975年
- 92) 『大阪朝日新聞』1937年4月19日、1941年4月1日
- 93) 『毎日新聞』(大阪)1943年5月26日
- 94) 個人所有
- 95) 『大阪毎日新聞』1938年5月18日、1940年4月27日  
『週刊少国民』1943年5月23日号

島本国民学校『島本郷土読本』1939年発行、1943年改訂

- 96)『大毎小学生新聞』1940年12月2日、14日  
『少国民新聞』1941年5月17日
- 97) 史蹟櫻井驛址拡張工事事務所『工事日記』  
『大阪毎日新聞』1939年4月12日
- 98)『大阪毎日新聞』1941年5月17日
- 99)『大阪毎日新聞』1942年3月21日
- 100)戦後、アラビア石油の社長になっている
- 101)『大毎小学生新聞』1938年9月1日
- 102)『大阪毎日新聞』1937年2月1日、1943年2月1日  
『朝日新聞』（大阪）1944年5月20日  
前掲『富田林高校百年史 1901～2001』
- 103)前掲『形像及碑表台帳大正元年～昭和18年』
- 104)『週刊少国民』1943年7月11日号
- 105)『朝日新聞』（大阪）1943年12月12日
- 106)『朝日新聞』（大阪）1943年8月1日
- 107)『朝日新聞』（大阪）1943年1月10日、1944年5月26日
- 108)『朝日新聞』（大阪）1944年2月26日
- 109)『毎日新聞』（大阪）1944年2月16日
- 110)『朝日新聞』（大阪）1944年4月25日、5月11日